

秀句十勝抄

弘安元年 五七歳

弘仁十三年六月四日遷化
伝教大師作

法華秀句三卷十勝 此の秀句は弘仁十二年^{大歳辛丑}之を造る中巻を見るべし。

得一の羽翼三巻

七教二理

四証二理

- 秀句
- 十勝
- 法華經の一代に超過せる事十有り。
- 仏説已顯真實勝一
- 仏説經名示義勝二
- 無問自説果分勝三
- 五仏道同歸一勝四
- 仏説諸經校量勝五
- 仏説十喩校量勝六
- 即身六根互用勝七
- 即身成仏化道勝八
- 多宝分身付囑勝九
- 普賢菩薩勸発勝十

秀句三巻 伝教大師作
にんのう かんむ 人王五十代桓武・平城一・嵯峨二
弘仁十三年六月四日^{せんげ}遷化

仏説已顯真實勝一

未顯已顯肩を比べて先を^{なら}争ひ、三乗一乗^{あらそ}権を訴へて是非す。現在の^{ごん}麁食者偽章数巻を造りて法を謗じ亦人を謗ず。法華經を謗じて則ち権と為し亦密と為す云云。

羽翼に云はく「問ふ、若し法華は是権教の^{しょう}撰ならば何が故ぞ經に世尊法久後・要当説真實と云ひ、又今為汝等・説最実事と云ふや。是即ち四十年の前の教は是権、法華の後の教は是実教の撰なりと説くなり。即ち無量義經に四十年の前は方便の説なるが故に得果差別せりと云ふに同ず。何ぞ法華を権教と名づくるや。答ふ、是^{ふじょうしょう}不定性の根機熟するに^よ拠って前後に而も説く。頓悟には約せず。此復云何。不定性の二乗、四十年より前には一乗の根機熟せず。此に由って如来為に一乗を説かず。故に世尊法久後と名づく。今、法華の^え会に至って其の根純熟して一乗を聞くに堪へたり。故に要当説真實と名づく。頓悟の菩薩は始め華嚴より涅槃の教に至るまで、恒に^{つね}一乗を聞き常に記別を授かる。故に法久後と名づけず。常に一乗^{また}真實の法を聴受す。故に復要当説真實と名づけず」と。

又云はく「舍利弗自ら^{りょうげ}領解して云はく、我昔仏に従って是くの如きの法を聞き、諸の菩薩の受記作仏するを見る。而も我等は^こ斯の事に預からず。甚だ自ら如来の無量の知見を失へることを感傷しき」^{已上}經文。麁食者、經の^{こころ}意を取って云はく「此即ち華嚴の会よ

り後四十余年、頓悟の菩薩の受記作仏を見て咨嗟を發して悔ゆと。此の文に准じて知んぬ、頓悟の菩薩に約せば世尊法久後と名づけず、要当説眞実と稱せざることを。唯舍利弗等の不定性の声聞、四十年の前には小乗の果に住し、未だ一乘を聞かず未だ仏記を受けず。故に声聞に約して法久後と名づく。今法華の会に至って一乘の法を聞き、仏の記別を受く。故に要当説眞実と稱す。」

仏説經名示義勝二

当に知るべし、果分の經には十七の名を具せること秀句の語なり。

一には無量義經と名づく。迹中の諸經は仏意を談ぜず。故に有量と名づく。今經は本迹施開廢の三。仏旨無尽なり。故に無量と云ふ。況んや成道の後処々に開廢すれば無量義と名づく。 二には最勝修多羅と名づく。三には大方広と名づく。四には教菩薩法と名づく。五には仏所護念と名づく。六には一切諸仏秘密法と名づく。七には一切諸仏藏と名づく。八には一切諸仏秘密處と名づく。九には能生一切諸仏と名づく。十には一切諸仏道場と名づく。十一には一切諸仏所轉法輪と名づく。十二には一切諸仏堅固舍利と名づく。十三には一切諸仏大巧方便經と名づく。十四には説一乘經と名づく。十五には第一義住と名づく。十六には妙法蓮華經と名づく。私に云はく。經の字の有無は異本なり。 十七には最上法門と名づく。籤の七、今略して法華論の十七名の中の意を知らんと欲せば、第十六既に妙法蓮華と名づく。当に知るべし、諸名並びに是法華の異名なるのみ。

秀句に云はく、当に知るべし、りやくこうしゆぎょう歴劫修行頓悟の菩薩は終に無上菩提を成ずることを得ず。未だ菩提のだいじきどう大直道を知らざるが故に終不得の言大小俱に有り。直道直至は已顯の日に興る。是の故に法華經の宗は諸宗の中の最勝なり。法相の慈恩大師の法華玄贊十卷贊しよと三論のつぶさ疏との法華に順ぜざること具に別に説くが如し。

嘉祥寺吉藏大師の法華玄十卷

日蓮疑って云はく、光宅の法華の疏、じょうくう上宮の法華の疏等並びに畏・智・空のいな大日經の疏、法藏の華嚴經の疏等は法華並びに一切經の意に順ずるや不いなや。

無問自説果分勝三

謹んで法華經方便品を案ずるに云はく「爾時世尊從三昧、乃至所不能知」已上經文。又偈に云はく「不退〇」已上偈文。又經に云はく「仏所成就、乃至乃能究尽」已上經文。是くの如き等は果分の法を示す。

又云はく「諸仏世尊唯以一大事因緣故出現於世」しゆつげんのせ已上經文。当に知るべし、一乘の為の故に世に出現したまひて、三乗の為に世に出現したまはざることを。果分の一乘あまね遍く衆生に施したまふ。いすくもんげもと寧んぞ門外に車を索め門側にして庵に住せんや。父を知り家を知り車を知り道を知る、あにうえ豈歴劫の路に入りて迂迴の道を過ぎんや。故に譬喩品に云はく「今所応作唯仏智慧」已上經文。菩薩の智慧は所応作ならず。是の故に又云はく「若し善男子善女人、我が滅度の後竊かに一人の為にも法華經の乃至一句をも説かん。当に知るべし、是の人は則ち如来の使ひ如来の所遣として如来の事を行ずるなり」已上經文。明らかに知んぬ、法華經を説く人は即ち是如来の使ひにして、即ち如来の事を行ずるなり。又云はく、

之を略す。

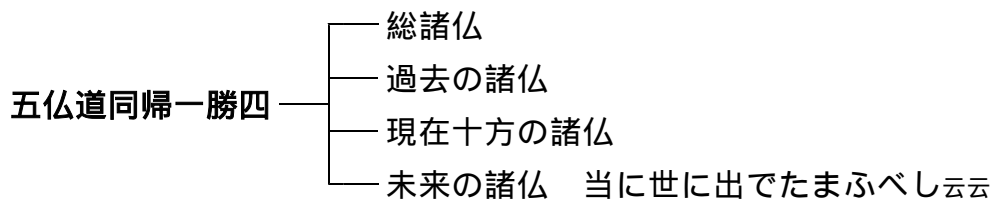
又神力品に云はく「要を以て之を言はば、如来一切所有の法も、如来一切自在の神力も、如来一切秘要の蔵も、如来一切甚深の事も、皆此の經に於て宣示顯説す」已上。明らかに知んぬ、果分の一切の所有の法、果分の一切の自在の神力、果分の一切の秘要の蔵、果分の一切の甚深の事、皆法華に於て宣示し顯説するなり。夫華嚴經は 但住上地上の因分を説いて、未だ如来内証の果分を説かず。故に天親てんじんの十地論に、因分可説・果分不可説と云ふは即ち其の事ことなり。当に知るべし、果分は因分に勝ることを。

夫三十唯識論は一卷二紙、天親ほんじゆの本頌なり。華嚴等の經に依つて唯識の義を立つ。乃至是の故に妙法華の宗に対比するに足らず。

夫中・百・十二門の七巻の論は竜・提二菩薩の所造なり 大乘無相の空教を採集せり已上。明らかに知んぬ。但因分の空の歴劫修行を説いて未だ果分の空の大直道を説かざることを。

誠に願はくは一乗の君子なか仏説に依憑して口伝を信ずること莫れ。仰いで誠あお文を信じじようもんて偽会ぎえを信ずること莫れ。天台所釈の法華經の宗は諸宗に勝れたり。寧んぞ所伝むなを空しうせんや。

日 蓮 花 押



当に知るべし、未来の諸仏むじやく・弥勒・無著等先に方便を以て三乗の法を説きたまふことを。法相所伝の三乗等の宗は 未だ究竟せざるが故に眞実の説にあらず。華嚴・三論二宗の所伝も之に准じて知んぬべし。

又云はく、仏滅度の後の六百年の經宗・論宗、九百年の中の法相の一宗は歴劫の行を説いて衆生いんじようを引接す。是の故に未顯眞実ともに並に包含せらるゝなり。

又云はく、法華の前の四時の教を指して經に四十余年未顯眞実と云ふ。阿毘達磨あびだるまの兩箇の宗・修多羅の華嚴宗は四十余年に包含せらるゝが故に未だ究竟せず、故に仏の会釈えしゃく無きなり。

又云はく、華嚴の一道、深密の一乗は成不成の二説俱に存す。是の故にじようろん 諍論もとの本なり。法華の一乗皆悉く成仏す。是一説なるが故に諍論の本ならず。他宗所依の經は其の本性に随つて説く。天台法華宗は出世本法の説なり。当に知るべし、後一の宗は諸宗に勝ることを。

日蓮疑つて云はく、華嚴・涅槃・金光明・深密等は天台・妙楽・伝教の御釈をも

って知んぬべし。知り難きは、密嚴經みつごんに云はく「十地・華嚴等の大樹しょうまんと神通勝鬘及び余經と皆此の經より出づ。是くの如く密嚴經は一切經の中に勝れたり」と。大雲經の第四に云はく「是の經は即ち是諸經の轉輪聖王てんりんじょうおうなり。何を以ての故に。是の經典の中には衆生じっしよつの実性、仏性常住の法蔵を宣説する故なり」と。大論に云はく「本起經ほんぎ・斷一切衆生疑經だんいっさいしじゅうぎ・華手經けしゅ・法華經・雲經・大雲經・法雲經・弥勒問經・六波羅蜜經・摩訶般若波羅蜜經、是くの如き等の無量無辺阿僧祇の經は或は仏の説、或は化仏の説、或は大菩薩の説、或は声聞の説、或は諸の得道天の説なり。是の事ま和合して皆摩訶衍かえんと名づく。此の諸經の中に般若波羅蜜最も大なり」と。

仏説諸經校量勝五

謹んで法華經法師品を案ずるに云はく「我所説諸經、而於此經中、法華最第一」已上經文。当に知るべし、斯の法華經は諸經の中に最も為れ第一なり。釈迦世尊、宗を立つるの言、法華を極と為す。金口の校量なり。深く信受すべきや。

又云はく「爾時 而此經者、如来現在、猶多怨嫉、況滅度後」已上經文。当に知るべし、已説の四時の經、今説の無量義、当説の涅槃經は易信易解なり、隨他意の故に。此の法華經は最も為れ難信難解なり、隨自意の故に。隨自意の説は隨他意に勝れたり。但し無量義を隨他意といふは未合の一辺を指す、余部の隨他意に同じからざるなり。代を語れば則ち像の終はり末の初め、地を尋ぬれば唐の東、羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生、鬪争の時なり。經に云はく「猶多怨嫉、況滅度後」と、此の言良まことに以有るなり。

又安樂行品に云はく「文殊師利、是の法華經は無量の国中に於て、乃至名字をも聞くことを得べからず。何に況んや見ることを得て受持読誦せんをや」已上經文。当に知るべし、天台所釈の法華宗は名字をも聞くこと難し。何に況んや読誦せんをや。他宗には此の歎なし。何ぞ法華に歸せざらん。有る人問うて曰く、法相宗の人法華の贊を造って盛んに法華を弘む。其の疏記等数百卷あり。又三論宗の人、法華の疏を造って盛んに法華を講ず。今の天台法華宗は何の異釈有って二宗に勝るゝや。答ふ、若し異釈を論ぜば玄・疏・籤・記四十卷あり。今一隅を指して三方を知らしめん。法相宗の人は成唯識を以て尊主と為し、法華の義を屈して唯識に歸せしむ。法華經を贊すと雖も、還って法華の心こころを死す。故に湛然の記に云はく「唯識の滅種は其の心を死す」と。

記の十に云はく「然るに此の經は常住仏性を以て咽喉と為し、一乘妙行を以て眼目と為し、再生敗種を以て心腑と為し、顯本遠寿を以て其の命と為す。而るを却って唯識の滅種を以て其の心を死し、婆沙の菩薩を以て其の眼まなこを掩ひ、寿量を以て釈疑と為して其の命を断じ、常住遍からざるを以て其の喉のどを割き、三界八獄を以て大科と為して斯これに形たくらべて小と為し、一乘四徳を以て小義と為して会歸えきすべき無し。斯に拠よって以て論ずるに諸例識しりぬべし」文。

当に知るべし、其の義懸はるかに別なることを。又三論宗の人、法華の疏を造ると雖も其

の義未だ究竟せず。是の故に嘉祥大徳は称心に帰伏す。高僧伝の第十九を案ずるに「灌頂、晩に称心精舎を出でて法華を開講すること朗龍慧竜に跨え、雲曇印に超えたり。方集奔随し、篋を負ひて書誦す。吉蔵法師なるもの有り、興皇の入室なり。嘉祥に肆を結び独り擅にす義記を求借して浅深を尋閱す。乃ち知んぬ、体解心酔従ふ所有ることを。因って講を廢し衆を散じ、天台に投足し法華を餐稟し發誓弘演せり」と。当に知るべし、法華の疏ありと雖も天台の釈に如かざることを。

嘉祥の法華玄十卷に
三種の法輪

- 華嚴は根本
- 三味は枝末
- 法華は撰末歸本

又云はく会二破二

- 已一般若
- 今法華
- 当涅槃等

又云はく五時一阿含・般若・方等・法華・涅槃

記の三に云はく「嘉祥、身妙化に沾ひ、義已に神に灌ぐ」文。

又云はく「旧章須く改むべし。若し旧立に依らば師資成ぜず。伏膺の説施すこと靡く、頂戴の言奚んぞ寄せん」と。

輔の三に云はく「嘉祥とは寺の名なり、会稽に在り。王義之、宅を捨て、立つる所なり、名は吉蔵、胡郷の所生なり、世に覺海と稱す。心に難伏の慧を包み口に如流の弁を瀉ぐ。章疏を著述し徒を領し化を盛んにす。大師初めて陳の都に至る。沙弥法盛なるもの有り、席に造って数問ふ。法師言對ふること無し。法盛時に年十七、身小にして声大なり。法師嘲りて曰く、爾那んぞ声を摧きて体を補はざるや。法盛声に應じて對へて曰く、法師何ぞ鼻を削りて眸を填めざる。吉蔵良久しく咽んで調を更めて曰く、汝好々問へ、闍梨好々汝が為に答へん。法盛曰く、野子の和上は著はれて經文に在り。胡、闍梨と作る、何れの典拠に出でたる。吉蔵泣いて謂ひて曰く、尺水は計るに丈波無し。法盛曰く、余が水は鯨鵠を浮かぶること能はずと雖も、亦蟻蜂を淹すに足れり。吉蔵又問ふ、誰か汝が師たる、汝は誰が弟子ぞ。法盛曰く、宿王種覺、天人衆の中に広く法華を説きたまふ。是我等が師、我は是弟子なり。講散じて乃ち山水納一領を捨て用て大師に奉る。遂に即ち伏膺し請じて法華を講ぜしめ、身を肉磔となして用て高座に登す。後章安の義記を借るに因って乃ち弥浅深に達し、体解け口鉗み、身踊り心酔ひ、講を廢し衆を散じ、天台に投足し、法華を餐稟し、弘演頂戴永々までにす。豈異轍を生ぜんや」と。

続高僧伝十九道言撰に云はく「晩に出でて發誓弘演す。十七年に至り智者疾を現じ、暁夕に瞻待し艱劬心を尽くす。爰に滅度に及んで親しく遺旨を承る。乃ち留め書き並

びに諸の信物を奉じて哀泣跪授す。晋王乃ち五体を地に投じ、悲涙頂受し、事實礼に遵ひ、情法親に敦し。尋いで揚州の総管府司馬王弘をして頂を送って山に還し、智者の為に千僧齋を設け、国清寺に置く」と。

日蓮が云はく、此の龜鏡を以て案じて云はく、謗法謗人は其の法と人とに向かはずんば罪滅せざるか。弘法・慈覚・智証は如何。法蔵・澄観・慈恩・善導・善無畏・金剛智・不空は如何。

又経に云はく「当に知るべし、未だ法華を説かざる前の所説の諸経等は髻中の珠とするに足らず」と。

又経に云はく「諸経の中に於て最も其の上に在り」文。

明らかに知んぬ、天台所釈の法華の宗は釈迦世尊所立の宗、是諸の如来の第一の説なり。諸経の中に於て最も其の上に在り。大牟尼尊豈愛憎あらんや。是法の道理なり、是讚すべきのみ。天親論師は説無上と為す、良に以有るなり。天台法華宗の諸宗に勝るゝは、宗とする所の経に拠るが故なり。自讚毀他にはあらず。庶くば有智の君子、経を尋ねて宗を定めよ。

仏説十喩校量勝六

謹んで法華経の薬王菩薩本事品を案ずるに云はく「宿王華、譬へば一切の川流江河諸水の中に海為れ第一なるが如く、此の法華経も亦復是くの如し。諸の如来の所説の経の中に於て最も為れ深大なり」已上経文。天台の法華玄に云はく之を略す。明らかに知んぬ、他宗所依の経は大海の徳あること無し。唯法華宗のみ大海深大の徳あり第一の喩へ竟はる。

文句の十に云はく「本地を説き窮むるを深と為し、一切処に遍するを大と為す」

文。此の釈の心は、大海の譬へ本迹に亘るか。

又云はく「須弥山為れ第一なり」之を略す。第二の譬へ、竟はる。

又云はく「衆星の中に月天子最も為れ照明なるが如し」之を略す。第三の譬へ竟はる。迹門を以て水月に譬へ、本門を本月に譬ふる釈之有り。

又云はく「又日天子の能く諸の闇を除くが如く、此の経も亦復是くの如し。能く一切不善の闇を破す」已上経文。

玄一に云はく「灯炬星月は闇と共に住す、諸経の二乗の道果を存して小と並び立つるに譬ふるが故なり。日は能く闇を破する故に法華は化城を破し、草庵を除くが故なり。又日は日蓮が云はく、迹門を月に譬へ、本門を日に譬ふるか。九喩は如何。星月を映奪して現ぜざらしむるが故に、法華は迹を払ひ方便を除くが故なり」と。釈籤一に云はく「但日の明、能く諸明を映ずるを取るが故に」と。

秀句に、当に知るべし、他宗所依の経は破闇の義未だ円満ならず。故に日高山を照らせども未だ幽谷を照らさず。幽谷を照らすと雖も未だ平地を照らさず。天台法華宗は已に平地を照らす時山谷俱に照らす。故に能く不善の闇を破すこと深く以有るなり。

又云はく、之を略す。当に知るべし、未顕眞実の四十余年の所説の衆経等は彼の諸王の如

し。他宗所依の経は諸経の王等一両句の文有れども当分の王たるが故に転輪王と名づけず。已顕真実の日に説く所の法華は此転輪王の如し。天台法華宗は衆経の中に於て最も其の尊たり。是の諸宗に勝るゝことは是臆説おくせつに第五の喩へあらず竟はる。海・山・月・日・梵王は仏の全喩、輪王・帝釈・五仏子は菩薩の分喩なり。

大なること海の如く、高きこと山の如く、円かなること月の如く、明らかなること日の如く、自在なること梵王の如く、極なること仏の如し。

又云はく、第六の譬へ之を略す。

「又大梵天王の一切衆生の父なるが如く、此の経も亦復是くの如し。一切の賢聖げんじょう・学無学及び菩薩の心をお発おこせる者の父なり」已上經文。玄に云はく、略す。

経と玄と開合して王が中の王なるを顕はさんが為なり 王中の王を法華に喩ふ 明らかに知んぬ、他宗所依の経は是王の中の王にあらず。天台法華宗のみ独り王が中の王たることを。大日経第七に云はく、我が大日経王の説に依る。金剛頂經に云はく、大教王經。蘇悉地經に云はく、三部の中に於て此の経を王と為す云云。日蓮が云はく、大日三部経は小王の中の王か、中王の内か、将又王が中の王に勝るか。 当に知るべし、他宗所依の経は一分の仏母いちぶん ぶつ もの義有りと雖も、然も但愛のみ有りてお蔽の義を欠く。天台法華宗のみ蔽愛の義を具す。一切賢聖・学無学及び菩薩の心をお発おこせる者の父なり

第七の喩へ竟はる。

又第八「一切凡夫人の中に須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支仏びやくし ぶつ こ為れ第一なるが如く、此の経も亦復是くの如し。一切如来の所説、若しは菩薩の所説、若しは声聞の所説、諸の経法の中に最も為れ第一なり。能く是の經典を受持すること有らん者も亦復是くの如し。一切衆生の中に於て亦為れ第一なり」已上經文。玄は略す。 当に知るべし、他宗所依の経は未だ最も為れ第一ならず。其の能く経を持つ者も亦未だ第一ならず。天台法華宗所持の法華は最も為れ第一なり。故に能く法華を持つ者も亦衆生の中に第一なり。已に仏説あに じ たんに第八の譬へ抛る、豈自歎あに じ たんならんや竟はる。

日蓮疑って云はく、真言宗の畏・智・空・法・覺・証と伝教大師末学の法華の行者の四衆と勝劣如何。

又第九云はく「一切の声聞・辟支仏の中に菩薩為れ第一なり。此の経も亦復是くの如し。一切の諸の経法の中に於て最も為れ第一なり」已上經文。之を略す。 又云はく「仏の諸法の王な為るが如く此の経も亦復是くの如し。諸経の中の王なり」已上經文。

日蓮私に入る。玄に云はく「又薬王品に十譬を挙げて教を歎ず。今其の六を引かんに、大なること海の如く、高きこと山の如く、円かなること月の如く、照らすこと日の如く、自在なること梵王の如く、極なること仏の如し」と。又云はく「月は能くきょうえい虧盈するが故に、月は漸く円かなるが故に法華も亦爾なり。同体の権実なるが故に漸を会してとん頓に入るが故なり。灯炬星月は闇と共に住す。諸経の二乗の道果を存し小と並び立つに譬ふ故に。日は能く闇を破するが故に、法華は化城を破し草庵を除くが故なり。又日は星月を映奪して現ぜざらしむるが故に、法華は迹を払ひ方便を除くが故なり」と。籤一に云はく「次に月の譬へとは、実は盈つるが如く権は虧くるが如し。同体の権実は月輪の欠くること無きが如く、漸を会して頓に入るは明相のみょうそう

漸く円かなるが如し。故に知んぬ、前の教相の中に是漸頓と云へるは月の譬へと意同じきことを。経の中には星を以て月天子に比し天子を挙ぐると雖も、経に合すれば既に此の法華経最も為れ照明なりと云ふ。故に今は但円を取り、亦兼ねて明を以て譬へと為す。次に日の譬への中に復灯炬を加ふ。今日の譬へに合する中に破化城故と云ふは、但日の明の能く諸明の映ずるを取るが故なるのみ。若し更に合せば亦灯等の四を以て二乗及び通別の菩薩に譬ふべし。並びに無明と共に住するが故なり。故に次に重ねて引く中に略して星月を挙げて而も方便を除く。故に知んぬ、方便の所収復広きことを」と。

此の秀句に云はく、天台の法華玄に云はく、月は能く乃至灯炬星月は闇と共に住す。諸経の二乗の道果を存して小と並び立つを譬ふ^{已上}。乃至^{第三の譬へ}。又云はく、又如日天子乃至^{第四の譬へ}。

第十には仏を法王に喩ふ。日蓮が云はく、迹仏は長者の位、本仏は法王の位か。

此の秀句に云はく、他宗所依の教には都て此の十喩無し。唯法華にのみ此の十喩有り。若し他宗の経に此の喩へ有りと雖も当分跨節を分別するのみ。釈尊、宗を立てたまふに法華を極と為す。本法の故に時を待ち機を待つ。論師の宗を立つるには自見を極と為す。随宜の故に空を立て有を立つ。誠に願はくば有智の聖賢玄かに仏説を鑑みて指南と為すべし^{第十の譬へ}。

論師の宗を立つるには自見を極と為す云云。授決集に云はく「徴^{ちょう}他学^{たがくけつ}決^{かく}五十二。真言・禅門・華嚴・三論・唯識・律宗・成俱の二論等、乃至^{あやま}謬^{じゆ}って真言を誦すとも三観一心の妙趣^えを会せずんば、恐らくは別人に同じて妙理を証せじ。所以に他の所期の極^{したが}に遂^すひ理に准じて^{我が宗の}我^{ちよう}が宗^{ちよう}の^{ちよう}徴^{ちよう}すべし。因明の道理と外道と対すること、多く小乗及び別教に在り。若し法華・華嚴・涅槃等の経に望むれば是^{しやういんもん}撰^{かり}引^{かり}門^{かり}なり。権に機に対して設けたり。終に以て引進して邪小の徒をして会して真理に至らしむるなり。所以に論ずる時は四依^{きやくもく}擊^き目の志を存して之に執著すること莫れ。又^{すべから}須^{すべ}く他^{すべから}を將^もって自義^もに對^も検^もし、随^もって是非^もを決^もすべし。執^もして之^もを怨^もむこと莫^もれ。大底は他は多く三教に在り。故に円旨至^もって少^もなきのみ」云云。

日蓮云はく、園城寺の末学等請^{おんじやうじ}ふらくは具に此の決を見よ。智証大師一生の間未だ思ひ定めざるか。但此の一段にのみ師の言を載^のするか。悲しひかな、当世叡山・園城・東寺等の真言宗の学者等深く初めの猿^{たの}を恃んで永く井の底に沈まんこと云云。

即身六根互用勝七

謹んで法華経法師功德品を案ずるに云はく「当に八百の眼の功德、千二百の耳の功德、八百の鼻の功德、千二百の舌の功德、八百の身の功德、千二百の意の功德を得べし。是の功德を以て六根を莊嚴して皆清浄ならしむ」^{已上}。当に知るべし、受持の法師一、読の

法師二、誦の法師三、解説の法師四、書写の法師五、是の五種法師各法華經に依って各六千の功德を獲る。其の六即位の中には第四の相似即の位なり 父母所生の清淨の肉眼をもって 明らかに知んぬ、父母所生とは即身の異名なり。偈に云はく「未だ天眼を得ずと雖も肉眼の力是くの如し」已上經文。 当に知るべし、実經の力用は肉眼をして淨からしむ。他宗所依の經には都て此の眼の用無し。天台法華宗には具に此の眼の用有り 又云はく「未だ無漏法性むろほっしょうの妙身を得ずと雖も清淨の常体を以て一切中に於て現ず」と 天親菩薩謂はく「諸の凡夫は經力を以ての故に勝根の用を得ん」已上論文。 当に知るべし、諸の凡夫人の修学すべき經なり。他宗所依の經には都て此の力無き故に。天台法華宗には具に此の力有る故に。権実かんが 検ふべく妙行進むべし。互用の文、論に具に説くが如し。

玄六に云はく「三根は三根とは眼耳鼻なり 種々の義強き故に千二百の功德有り。三根は三根とは鼻舌身なり 力弱き故に但八百の功德なりとは云云大論に釈す 蓋し一途の別説なり、經の円意に非ず」文。又云はく「能等」と。又云はく「能縮」と。又云はく「能盈」と。又云はく「經に云はく、若し能く是の經を持つ功德は則ち無量にして、虚空無辺なるが如く其の福限るべからずと。互用の意彰らかなり」と。籤九に云はく「しねんじよ 四念処に云はく、六根清淨に真有り似有り。真は華嚴の如く初住の十種の六根を説くなり 似は法華の如し」と。私に日蓮云はく、大日經の六根互用の疏等に天台宗の如し云云。随つて慈覺・智証等之を承用す、爾るべきや不や。

文句十に云はく「正法華には整束して六千の功德を具し、上中下を論ぜず」と。又云はく「今經の六根清淨は大品と同じ。是の功德を以て六根を莊嚴すとは正法華と同じ」と。玄六に云はく「正法華には功德正等にして等しく千なり」と。又云はく「能等は正法華に説くが如く、能縮は身・眼・鼻の八百の如く、能盈は耳・舌・意の千二百の如し」と。經に云はく「若し能く是の經を持つ功德は則ち無量にして虚空の無辺なるが如し。其の福限るべからず」と。互用の意彰らかなり。正に云はく「是の經典を受け、持・読・書写せば当に千眼功德の本・八百の名称・千二百の耳根・千二百の鼻根・千二百の舌根・千二百の身行・千二百の意淨を得べし。是を無数百千品の徳と為す。則ち能く六根の功祚を嚴淨す」と。又云はく「八百の諸の名称清淨にして目明朗らかなり」と。又云はく「八百の鼻の功德を得」と。又云はく「身行八百の功德を逮得せん」と。首楞嚴經第四に云はく「六根の中各々の功德に千二百有り。阿難、汝復中に於て克く優劣を定めよ。眼の觀見するが如き、後は暗く前は明らかなり。前の方は全く明らかに後の方は全く暗し。左右旁觀すること三分の二なり。統べて所作を論ずるに功德全からず。三分は功を言ふとも一分は徳無し。当に知るべし、眼は唯八百の功德のみなることを。耳の周く聴くが如きは十方遺すこと無し。動は邇遙に若へ、静は辺際無し。当に知るべし、耳根の一千二百の功德を円満することを。鼻の嗅聞の如きは出入の息に通ず。出

有り入有りて中交を欠く。鼻根を驗あらたむるに三分に一を欠く。当に知るべし、鼻は唯八百の功德のみなることを。舌の宣揚して諸の世間・出世間の智を尽くすが如きは、言には方分有れども理に窮尽無し。当に知るべし、舌根の一千二百の功德を円満することを。身の触を覚え違順を識るが如きは、合する時は能く覺し、離るゝ中には知らず、離は一にして合はそろ双へり。身根を驗あらたむるに三分に一を欠けり。当に知るべし、身は唯八百の功德なることを。意の黙して十方三世の一切世間・出世間の法を容いるゝが如きは、唯聖と凡とを包容して其の涯際がいさいを尽くさざること無し。当に知るべし、意根の一千二百の功德を円満せることを 深く一門に入って能く六根をして一時に清浄ならしむ」と。大論四十に云はく「鼻・舌・身は同じく覺と稱し、眼は見と稱し、耳は聞と稱し、意は知と稱す」云云。

即身成仏化道勝八

謹んで法華經提婆達多品を案ずるに云はく之を略す。 当に知るべし、此の文は經の力用を顯はすことを。六趣の中には是畜生趣、不善の報を明かす。男女の中には是即ち女身、不善の機を明かす。長幼の中には是即ち小女、不久修を明かす。然りと雖も妙法華の甚深微妙の力をもって具に二に蔽ごんの用を得。明らかに知んぬ、法華の力用は諸經の中の宝、世に希有なる所なることを。又經に云はく「智積ちしゃく」之を略す。 已上經文。 当に知るべし、智積菩薩此に歴劫修行を挙げて即身成仏を難じ、三阿僧祇の仏を信じて須臾じゅうの成じょうを信ぜざること。今時三が中おおに大いに疑難する所の勢ひ、之の智積の難ひらに過ぎず。又經に云はく「偈を以て讚めて曰く、深く罪福の相に達し 我は大乘の教を闡いて苦の衆生を度脱せん」已上經文。 初めの深達罪福相とは罪福多種なり。故に四惡道を罪と為し、人天を以て福と為す一。又人天を罪と為し、二乗を以て福と為す二。両教の二乗を以て罪と為し、六度の菩薩を以て福と為す三。六度の菩薩を以て罪と為し、通教の菩薩を以て福と為す四。通教の菩薩を以て罪と為し、別教の菩薩を以て福と為す五。別教の菩薩を以て罪と為し、円教の菩薩を以て福と為す六。是くの如き罪福の相、理の如く了達する故に、是の故に名づけて深達と為す。若し未だ六重を達せざれば、深達と名づけることを得ず。当に知るべし、竜女深く法身に達することを挙げて、引きて唯仏を証することを。次に經に云はく「爾の時に舍利弗、竜女に語って言はく、汝久しからずして無上道を得たりと謂へり。是の事信じ難し」云云。之を略す。 当に知るべし、舍利弗は小乘三藏教の三僧祇劫に六度の行を修し、百劫そうごうに相好の業を修することを信じて、法華の直ちに道場に至って、須臾あいたの頃すなわに便いかんち正覺を成ずるを信ぜざること。次に經に云はく「又女人の身には猶五障有り 五には仏身なり。云何ぞ女身にして速やかに成仏することを得ん」已上經文。 有る人会して云はく、是は此權化なり、実凡は成ぜずと。難じて云はく、權は是実を引く、実凡成仏せずんば權化無用なり、經力をして没せしめん。釈迦は智積を留め、文殊は妙法を弘め、竜女は經力を顯はす、是くの如き妙論議は已顯真實の經に宣示顯説するなり 能

化所化俱に歴劫無し、妙法経力もって即身に成仏す文。

又云はく、他宗所依の経には都て即身入無し、一分即入すと雖も八地已上に推りて凡夫の身を許さず、天台法華宗には具に即入の義あり 即身成仏化道の義寧んぞ能く他宗に勝れざらんや。

文句の八に云はく「智積は別教に執して疑を為し、竜女は円を明かして疑を釈し、身子は三蔵の権を挟んで難じ、竜女は一実を以て疑を除く」と。又云はく「竜女の現成明証に復二あり。一には珠を献じて円因を得るを表はす。仏に奉るは是因を將って果を剋す。仏受くること疾きは果を獲るの速やかなるなり。此即ち一念に道場に坐して成仏虚しからざるなり。二には正しく因円果満を示す。胎経私に云はく爾前の円は生身得忍なりに云はく、魔・梵・釈・女は皆身を捨てず、身を受けずして、悉く現身に於て成仏を得と。故に偈に言はく、法性は大海の如く是非有りと説かず、凡夫・賢聖の人平等にして高下無く、唯心垢の滅するに在り、証を取ること掌を反すが如し」と。

記の八に云はく「正に円果を示す中に竜女作仏と云ふは、問ふ、分段を捨てずして即ち成仏為るや。若し即身に成仏せずんば、此の竜女の成仏及び胎経の偈云何が通ぜんや。答ふ、今の竜女の文は権に従って説く、以て円経の成仏速疾なるを証す。若し実行疾からざれば権行徒に引くならん。是即ち権実の義等しくして理徒然ならず。故に胎経の偈は実得に従って説く生身得忍の意。若し実得ならば六根清浄より無生忍を得、物の好む所に応じて神変を起こし現身に成仏し、及び円経を証すべし。既に無生を証す、豈知ること能はざらん。本捨受無けれども、何ぞ此を捨て彼に往くことを妨げん。余教の凡位此の会の中に至って、進んで無明を断ずるも亦復是くの如し。凡そ此くの如き例は必ず須く権実不二を以て疑妨を釈すべし」と。文句の八に云はく「此は是権巧ごんぎょうの力、一身一切身を得。普現色身三昧なり」と。記の八に云はく「権巧と言ふは必ずしも一向に唯権ただの釈を作すにあらず。只竜女已に無生を得と云ふときは、則ち体用に約して権巧を論ず。専ら本迹に約して権巧と為すと謂ふには非ず。故に権実の二義、経力俱に成ぜり。他人此を釈するに或は七地・十地等と云ふは経の力用を顕はすこと能はざる故なり」と。

輔に云はく「経に深達罪福相とは、問ふ、此は是仏を讃ずるや自讃と為るや。答ふ、経及び疏を觀るに是自身の所証を讃じて、以て智積の疑を釈するなり」と。

日蓮疑って云はく、法華の天台・妙楽・伝教の心は大日経等の即身成仏を許すや。慈覺・智証等之を許す。安慧・安然等も又之を許す。随って日本国の末学も之を許せり。

菩薩心論此の論は竜猛菩薩の造。不空の訳。或は不空の造と云ふに云はく「唯真言法の中にのみ即身成仏するが故に是に三摩地の法を説く。諸教の中に於て欠いて書せず」と。又云はく「勝義・行願の

三摩地云云。第三に三摩地と言へるは三十七尊を釈して金剛頂經の心を引き、又摩訶般若經を引く。此の甚深秘密の瑜伽を説いて、修行者をして内心の中に於て日月輪を觀ぜしむ」と。又云はく「我自心を見るに形月輪の如し」と。又云はく「一切の有情、心質の中に於て一分の淨性有り、衆行皆備はれり。其の体極めて微妙にして皎然として明白なり。乃至六趣に輪回すれども亦變易へんにやくせざること月の十六分の一の如し」と。又云はく「初めに阿字を以て本心の中の分の明を發起して、只漸く潔白分明ならしめて無生智を証す。夫阿字とは一切諸法本不生の義なり。毘盧遮那經の疏に准ぜば阿字を釈するに具に五義有り。一には阿字あじ短短是菩提心なり。二には阿字あーじ引引是菩提行なり。三には暗字あんじ短短是証菩提の義なり。四には惡字あくじ短短是般涅槃の義なり。五には惡字あーくじ引引是具足方便智の義なり。又阿字を將つて法華經の中の開示悟入の四字に配解せば、開の字は仏知見を開く。即ちなら双べて菩提心を開くこと初めの阿字の如し。是菩提心の義なり。示の字は仏知見を示す。第二の阿字の如し。是れ菩提行の義なり。悟の字は仏知見を悟る。第三の暗字の如し。是証菩提の義なり。入の字は仏知見に入る。第四の惡字の如し。是般涅槃の義なり。総じて之を言へば具足成就の第五の惡字あーくじなり。是方便善巧智円満の義なり。即ち阿字は是菩提心の義なることを讃ずるなり。頌に曰く、八葉の白蓮、一肘いっぢゆうの間に阿字素光の色を炳現す。禅智俱に金剛縛へいげんに入って如来寂靜じやくじようの智を召入しょうにゆうす。五相成身じょうしん云云。一には通達心、二には菩提心、三には金剛心、四には金剛身、五には無上菩提を証して金剛堅固の身を獲るなり。然も此の五相具に備はれば方に本尊の身と成るなり」と。「大毘盧遮那經に云はく、是くの如く眞実心の故に仏宣説したまふ所なり」と。又云はく「妙道を欲求し、次第を修持して、凡より仏位に入る者なり。即ち此の三摩地とは」と。又云はく「故に大毘盧遮那經に云はく、悉地は心より生ず。金剛頂瑜伽經に説くが如し。一切義成就菩薩」と。又云はく「故に大毘盧遮那經供養次第法に云はく、若しせいりき勢力無くんば」と。又云はく「菩提心を讃して曰く、若し人ぶつて仏慧を求めて菩提心に通達せば父母所生の身をもつて速やかに大覺位を証す」と。二教論弘法大師作下に云はく「菩提心論に云はく、諸仏菩薩昔因地に在って是の心を発こし已はって勝義・行願・三摩地を戒と為し、乃し成仏に至るまで、時として暫くも忘るゝこと無し。惟ただ眞言の法の中にのみ即身成仏するが故に是三摩地の法を説く。諸教の中に於て欠きて書せずと。喩して曰く、此の論は竜樹大聖の所造の千部の論の中の密藏肝心の論なり。是の故に顯密二教の差別浅深及び成仏の遲速勝劣皆此の中に説けり。謂はく、諸教とは他受用身及び變化身等の所説の法、諸の顯教なり。是説三摩地法とは自性法身所説の秘密眞言の三摩地門是なり。謂ゆる金剛頂の十万頌の經等是なり」と。菩提心義五大院の抄の一に「問ふ、此の二文一は菩提心義、二は菩提心論なり是誰が説くや。答ふ、眞言の目録には並びに不空と云ふ。私に二文をかんが検ふるに論は是竜樹の造、不空の訳なり。菩提心義は造主の名無し。而る

に古徳皆不空の造と云へるは疑ひ有るなり 問ふ、若し爾らば菩提心論に亦云はく、毘盧遮那經の疏に准じて阿字を釈するに具に五義あり文。豈不空の一行の記を引けるに非ずや。答ふ、彼は是後人、彼の疏の文を引いて論の中に註入せしなり。而るに有る論の本に長行に書けるは写生の悞りならん。問ふ、抑大日の疏に所引の文無きなり。何ぞ疏に准ずと言ふや。答ふ、高野の十四と二十の巻には此の文を脱せり。慈覺大師・遍明和尚・円成和上・円覺僧正等の本には並びに此の文あり。故に知んぬ、高野の抄本には脱去せるを。問ふ、菩提心義の末に古徳の注あり。云はく、高野の大僧正の進官入唐学法の目録の中に云はく、不空の訳なりと。今謂へらく、恐らくは是彼の不空の集なるのみ文。此の語を用ふるや否や。答ふ、縦令不空の集なりとも秘蔵の文をば集むべし。何が故ぞ唯顯教の經論のみを集むるや。故に用ひ難し。問ふ、若し終に疑ひあらば彼の五門を用ひざるや。答ふ、真言の古徳、目を閉ぢて信用す。今須く古に違はずして且く彼の文の五門を用ふると言ふ 問ふ、古徳の有るが云はく、有る目録に云く、菩提心論は不空の集なり、故に竜樹の説に非ずと。此の語用ふるや否や。答ふ、論に云はく、竜猛菩薩の造、不空詔を奉りて訳すと。而るに不空の集と言へるは憑無く用ひ叵し」と。

多宝分身付囑勝九

謹んで法華經の見宝塔品を案ずるに云はく「爾の時に多宝仏、宝塔の中に於て半座を分かちて、釈迦牟尼仏に与へて、而も是の言を作さく 大音声を以て普く四衆に告げたまはく、誰か能く此の娑婆国土に於て、広く妙法華經を説かん。今正しく是時なり。如来久しからずして当に涅槃に入るべし。仏此の妙法華經を以て付囑して在ること有らしめんと欲す」^{已上}經文。当に知るべし、過去の多宝・現在の釈尊同じく塔中に坐し、十方現在の釈迦の分身各八方に坐し、大会の四衆皆虚空に在って妙法華經付囑有在といふことを。他宗所依の經には都て此の付囑無し。天台法華宗のみ具に此の付囑有り。是の故に天親菩薩の釈論の下巻に云はく「多宝如来の塔は一切仏土の清浄なることを示現すとは」 其れ権大乘經は彼権の一乘經なれば都て此の付囑無し、未顯真實なるが故に。今の実大乘經は具に此の付囑有り、已顯真實なるが故に。他宗の經の付囑は法華宗に如かず 又六難を挙げて重ねて九易を示す。又經の偈に云はく「諸余の經典の数恒沙の如し」と 夫円經の心を発こして書持すること得難し。東隅の一公法華の中を制書し、法華の釈氏、大律儀を断ず。是則ち難しとなす。深く信じ恐るべし 夫円融の三諦を解し、暫くも法華經を読みたてまつるは濁惡の世の中に其の人極めて得難し。今の時法華を読むもの其の数 忽ち多きに似たり。然りと雖も即身に六根清浄の果無きは未だ円融の三諦を解了せざるに由る。故に難は則ち法華を指すなり 又云はく、夫円融の三諦は一乘の本法なり。持ち難く説き難し、所化も得ること難し。一人の爲にも説けば仏種断ぜず。是則ち難しと為す。難は則ち法華を指すなり 当に知るべし 未顯真實の八万法蔵十二

部經は是妙法ならず。是の故に易しと為すなり 夫仏知仏見は其の義解し難く、体内の権實は機に非ざれば信ぜず。是の故に法華を聴受し其の義趣を問ふは是則ち難しと為す。難は則ち法華を指すなり 夫当代に説法すれども、未だ一人をして羅漢を証得せしめず。何に況んや二・三・四・五・六・七人をや。何に況んや無量無数の恒沙の衆生に阿羅漢を得せしめんをや。而るに小乗の威儀に執して法華の制に順ぜず、大乘の威儀を奪って但兩聚の戒を許せり。寧んぞ大小権實の義を解了する者ならんや。既に得果の阿羅漢を挙げて「是の益有りと雖も未だ難しと為す」といへり。何ぞ固く其の威儀に執して、万億の行者を小道に引かんや。小乗の持戒は即ち菩薩の煩惱なりとは蓋し此の事を謂ふか。但し小儀に執せざるを除くなり。

又云はく、他宗所依の經は未だ九易の局りを出でず。天台法華宗のみ独り六難の頂に居す。誰か智有らん者經文を別たざらんや。是くの如き等の校量の付嘱は他宗の經に無き所にして唯法華經にのみ有り 浅きは易く深きは難しとは釈迦の所判なり。浅きを去って深きに就くは丈夫の心なり。天台大師は釈迦に信順して法華宗を助けて震旦に敷揚し、叡山の一家は天台に相承して法華宗を助けて日本に弘通す。夫玄賛の家は法華の旨を会して唯識の義に歸す。是則ち唯識の宗を弘めて法華を弘めず。無相の家は法華の旨を会して無相の義に歸す。是則ち無相の宗を弘めて法華を弘めず。是の故に天台一家は一切經を会して法華經に歸す。是則ち法華を敷揚して諸經を会通す。委曲の義は玄疏に出でたり。

日蓮疑って云はく、大日經等は九易の内か、六難の内か、仏法を習学せんの輩能く能く意を留めよ。日本国の弘法・慈覚・智証、漢土の善無畏・金剛智・不空等云云。日蓮が云はく、漢土・日本の智人等此の六人に拘はり、今生には国を亡し後生には無間を招かんか。乞ひ願はくは一切の学者等、人を捨て、法に附け。一生を空しうすること勿れ。

普賢菩薩勸發勝十

謹んで法華經の普賢菩薩勸發品を案ずるに云はく、^{之を略す} 当に知るべし、普賢菩薩は法華を得ることを決して、滅後の持經者を勸發す。得經の義、意趣甚だ多し。卷を得、義を得、思を得、修を得、六即の位を経て分別すべきのみ。又云はく「爾の時に普賢菩薩復仏に白して言さく、世尊後五百歳に於て」と 当に知るべし、法華眞實の經は後五百歳に於て、必ず流伝すべきなり。普賢の正身、果分を守るが故に、持經者を護って安穩なることを得せしむ。他宗所依の經には都て此の勸發無し。天台法華宗には具に此の勸發有り 当に知るべし、普賢菩薩身を現じて法華を讀誦する者を供養することを。夫果分の經は因位の菩薩の人尊むべく貴むべし。故に法華經を供養す。他宗所依の經には都て此の供養無く亦此の安慰無し。天台法華宗には具に此の供養有り、亦此の安慰有り。勸發の功は果分の經に尽きぬ。

又云はく、円融三諦の義・陀羅尼は、^{ただ}唯法華のみに有って余経には都て無し。他宗所依の経には都て円益^{えんやく}を得ること無し。天台法華宗には具に円益を得ること有り。勧発の功は果分の経に尽きぬ。

又云はく「世尊、若し後世^{ごせ}後五百歳濁悪世の中に」云云。当に知るべし、法華経の力の故に後世の後五百歳に円機の四衆等。

又云はく、経に又云はく「亦復其れに陀羅尼呪を与へん、是の陀羅尼を得るが故に」云云。当に知るべし、法華経を護らんが為に真言を持者に与へ自身常に守護することを。他宗所依の経には都て此の勧発無し。天台法華宗には具に此の勧発有り。妙法の真言は他経に説かず。是の故に法華宗は二の論宗に勝れ、亦華嚴宗にも勝れたり。

又云はく、夫仏知・仏見の内証の経は信じ難く解し難し。果分の教は独り諸経^{ひい}に秀でて対無く比無し。全身の舍利は亦上亦一なり。深く金口^{こんく}を信ぜよ。

又云はく、天台法華宗の能説の仏は久遠実成なり。所説の経は髻中の明珠^{けいちゆう みょうじゆ}なり。能伝の師は靈山の聴衆なり。所伝の釈は諸宗の憑拠^{ひょうこ}なり。委曲の依憑は具に別の巻に有り文。

日蓮疑って云はく、伝教大師は真言宗を破せざるや。答ふ、依憑天台集序^{前入唐受法沙門伝灯大}法師位最澄撰「天台の伝法は諸家の明鏡なり。陳隋より以降興唐より已前、人は則ち歴代称して大師と為し、法は則ち諸宗をもつて証拠^{りょうしゆく}とす。故に梁肅の云はく、夫治世の経は孔門に非ずんば則ち三王四代の訓^{おし}へ、寝^いんで彰^{あら}はれず、出世の道は大師に非ずんば則ち三乗四教の旨、晦^{くら}くして明らかならざる者なりと。我が日本の天下は円機已に熟し、円教遂に興らん。此の間の後生各自宗に執して偏に妙法を破す 新来の真言家は則ち筆受の相承^{ほろぼ}を混し、旧到の華嚴家は則ち影響^{くどう}の軌模^{ようごう}を隠す。沈空の三論宗は彈呵の屈恥^{だんか}を忘れて称心の心酔^{くつち}を覆ひ、著有^{おお}の法相宗は僕陽^{じゃくう}の帰依^{ぼくよう}を非して、青竜^{はんぎよう}の判経^{はら}を撥^{はら}ふ。最澄南唐の後に此の一宗を稟^{けみ}け、東唐の訓^{かいさい}へを彼の戒疏^{けん}に闕し、円珠^{ほほしゆくばく}を海西^{こと}に拾^{ほほしゆくばく}ひ、連城^{ほほしゆくばく}を海東^{こと}に献^{ほほしゆくばく}ず。略菽麦^{ほほしゆくばく}の殊^{こと}なりを示し、目珠^{ほほしゆくばく}の別^{こと}を悟らしむ。謹んで依憑一卷^{ほほしゆくばく}を著して同我の後哲^{ほほしゆくばく}に贈る。其時興ること、日本第五十二葉^{ほほしゆくばく}・弘仁之七丙申^{ほほしゆくばく}の歳なり」と。

大唐新羅諸宗義匠^{だいとうしらぎ} 依憑天台義集一卷^{ぎしやう} 前入唐習業沙門最澄撰「大唐南岳の真言宗沙門一行、天台の三徳に同じて数息三諦の義あり。其の毘盧遮那経の疏第七の下に云はく、三落叉とは是数なり。数は是世間なり。出世の落叉は是見なり。三相とは謂はく字と印と本尊となり。随つて其の一を取るに一合の相是なり。字と印と尊と等しく、身と語と心と等しきをば実相を見ると名づく。乃至能く持誦せしむとは、淨ければ一切の罪をして除かしむ。若し淨からざれば更に一月^{いちげつ}等しく前の如くするなり。所説の念誦の数とは上の文に牒するなり。此の法則に異なるべからざるなり。是の故に耳をして聞かしめ、息出づる時は字出で、入る時は字入り、息に随つて出入せしむるな

り。今謂はく、天台の誦經は是円頓の数息なりとは是此の意なり 猶天台の法身・般若・解脱の義の如し」云云。

「天竺の名僧大唐に天台の教迹最も邪正を簡ぶに堪へたりと聞いて、湯仰訪問する縁。法華文句の記の第十卷の末に云はく、適江淮の四十余僧と往いて台山を礼す、因って不空三蔵の門人含光、勅を奉じて山に在りて修造するを見るに云はく、不空三蔵と親り天竺に遊ぶ、彼に僧あり、問うて曰はく、大唐に天台の教迹有り、最も邪正を簡び偏円を暁らむるに堪へたり、能く之を訳して將って此の土に至るべしやと。豈中国に法を失って之を四維に求むるに非ずや。而も此方に識ること有る者少なり、魯人の如きのみ。故に徳を厚うし道に向かふ者之を仰いで敬はざるは莫し。願はくは学者行者随力称讚せよ。応に知るべし、自行は人を兼ね並びに他典に異なることを」と。

吉蔵等一百余人の天台の請する言。「千年の興、五百の実、復今日に在り。南岳の叡聖、天台の明哲、昔は三業に住持し、今は二尊に紹係す。豈止甘露を振旦に灑ぐのみならん、亦当に法鼓を天竺に震ふべし。生知の妙悟、魏晋以来典籍風謠実に関連無し」と。

律宗道宣の天台を讃むる語。「法華を照了すること高輝の幽谷に臨むが若く、摩訶衍を説くこと長風の大虚に遊ぶに似たり。仮令文字の師千群万衆彼の妙弁を数尋ぬるとも能く窮むる者無きなり 義月を指すに同じ、筌蹄に滞らず 理無生に会し、宗は一極に歸する者なり」と。

依憑の御言。「吁乎 実なるかな、生まれながらにして知る者は上なり、学ぶは次なりと。此の言以有るなり。庭戸を出でずして天下知るべしとは、豈空しく伝へんや。此の間比蘇に在り。大唐にして天台を聞く。今吾が大師杖を葱嶺に遂かずと雖も、然も靈山の聴き、恒に心腑に存し、経を流沙に負はずと雖も而も南岳の告げ篤く簡牘に載す。三蔵は梵偈を印度に尋ね天台は法鼓を天竺に振るふ。波倫は漢に入つて文殊を台山に礼し、梵僧は呉に來たつて弥勒に東陽にして謁す。漢地已に聖あり。秦国何ぞ賢無からんや。支那の三蔵は諍論を天竺に和し、震旦の人師は群釈を梵本に糅ゆ。彼の智略に於ては神州も亦好し、此の義味に於ては大唐も亦妙なり。唯義理を敬信せよ、寧ぞ人法を謗じて殃を招かんや。耳を貴みて目を賤しむは漢人の嗟く所、遠きを敬ひ近きを軽んずるは此の間免れ難し。伏して願はくは心有らん君子、愛憎の情を捨て諸宗の憑を熟察せよ。今吾が天台大師法華経を説き法華経を釈すること特に群に秀でて唐に独歩す。明らかに知んぬ、如来の使ひなりと。讃ずる者は福を安明に積み、謗ずる者は罪を無間に開かん。然りと雖も信ずる者に於ては天鼓と為り、謗ずる者に於ては毒鼓と為る。信謗彼此決定して成仏せん。又偈に云はく略。詎ぞ福を捨て罪を慕ふ者あらんや。願はくは同じく一乗を見て俱に和合海に入らんことを」と。